21世紀型の人と街と商い

サステイナブルなグリーンの街づくり

ゆるぎない哲学と積み重ねた努力

松本　大地
商い創造研究所代表取締役

エコと共鳴するSC

今年のSC業界の最大の話題は、イオンレイクタウンであった。当初、うたわれたコピーは、「モールオブジャパン」。モールオブアメリカをイメージさせる巨大さが強調されたが、そのトーンは「エコ・ショッピングセンター」へと変化していった。今回、レイクタウンプロジェクトでは、外部アドバイザリースタッフとして基本計画づくりに参画し、何度もコンセプトメークの議論を重ねた。その突破口として、プロジェクトメンバーとアメリカ西海岸ポートランド、シアトルへの現地視察をした。そのことによってプロジェクトは大きく前進した。中でもオレゴン州ポートランドでの環境共生型の街づくりは、我が国が目指すべき持続可能で良質なライフスタイルの実態を示唆してくれた。そしてレイクタウンは、長年にわたり環境・社会貢献活動を続けているイオンの理念や姿勢を基にスタイリッシュなエコが共鳴する次世代型SCとなった。

昨年、ポートランドの街づくりについては本稿にて紹介し、その後4回現地を訪れたが、来訪するたびに緩やかな成長を続ける姿を見ることができた。その成長とは新しい道路や高層ビルができるのではなく、環境と共生した街を楽しむ交流人口とクリエーティブな人々が移住する定住人口が緩やかに増え、21世紀のライフスタイル像が計画的に築かれていることである。

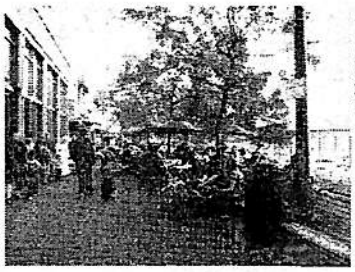
ポートランドでは〝サステイナビリティー（持続可能性）〟という言葉は、都市計画でも、経済的にも、日常生活でも、そして将来にとって切っても切り離せず、市民もビジネス界も議会も一体となって積極的に取り組み、実行されている。

ロープウエーの中も自転車持ち込みは可能（ポートランド）

住みやすい環境保つ

最近、アメリカの専門誌「ポピュラー・サイエンス・マガジン」に発表されたアメリカで最も環境問題に取り組んでいる人口10万人以上の都市50傑で、ポートランドは第1位にランクされた。水力・風力発電、太陽熱の利用度、公共交通機関の充実度、緑化空間や公園面積、コミュニティーのリサイクル度などが審査され、〝全米で最もグリーンな都市〟の栄誉を与えられた。グリーンという言葉は緑色の意味だが、最近は〝環境にやさしい〟の代名詞として使われており、ちなみに第2位はサンフランシスコ市、第3位はボストン市であった。

9月に面談したPDC（ポートランド開発局）でダウンタウン開発のリーダーであるルー・バウアーズ氏に、これからポートランドはどのような方向に進むのかと質問をしたところ、「米国の中で住みやすい街であるよう、環境を保つ努力をするのが目標で、そのために様々なサステイナビリティーを増やしていく」と答えた。


川沿いの散歩道にはレストランが連なる

また、ポートランド州立大学スティーブ・ジョンソン教授は、「ゴミのない街にするのに30年かかったように、小さなことを持続することが大切。例として、海岸を掃除する活動では、大勢のボランティアが集まるようになった。それにはゴミの中にわざとアートの小物を置き、宝物を探すような楽しい仕掛けをし、参加者はランチボックスを持参するなど、まるでピクニックのようなボランティア活動で持続していることなどもポートランドらしい」と語った。

最近、我が国でもエコバッグを持ち歩く人が増え、スーパーやコンビニでもレジ袋を使わないシーンを見かける。省エネ商品への関心も高まり、自家用車通勤から自転車通勤へと切り替える人も増え、それぞれ自分の出来ることから始めている。身近な環境問題を意識しながら生活を楽しみ、地域や自然を大切に思うことで未来が見えてくる。ポートランドやパタゴニアのように、都市の生き方や企業理念を理解してもらうには、ゆるぎない哲学と積み重ねた努力がいる。それでも見せかけではなく本気でやっていれば、必ず理解者は増えてくる。何かと暗いニュースが多い昨今であるが、環境にやさしいグリーンな良い風は、持続可能な街の成長と人づくりにつながり、そしてビジネスチャンスの好機となる。

従来の建築物ではないグリーン・ビルディング（環境にやさしい建築物）の研究と推進、環境問題と新しいビジネスの価値観を発信するグリーン・メディア、健康的なライフスタイルと地球にやさしいオーガニックや地産地消活動など、幅広い分野でグリーンはビジネスの芽が豊富にある。これからもグリーン思想を根底に、人と街と商いの持続的なリンケージを創造していきたい。